

プト史にまでもちこむことは永遠に不可能であろう(六頁)とのべている。著者はこのいみで、比較的史料の多い一八王朝に重点をおいたわけであるが、それでもなお叙述が断片的であることはいなめない。

最後にこの版(以下Wで示す)と“Blitzzeit”(以下Bで示す)を比較して、用語その他についてきついた点を二、三あげておきたい。

一、Bでは先史末期諸王国について何ものべられていないが、Wでは都市国家(city-state)とこうごころばがはつきりもちいられている。

二、中王国前期の社会についてはB同様WにおいてもFeudalismという表現が用いられ、また農民を表現するのにBではhöriger Bauerが、WではSertが用いられている。

三、時代区分については、古王国の上・下限はB、W共に第三一第六王朝であるが、Bが中王国を第一一第一三王朝としているのに対してWは第一二王朝のみをこれにあて、新王国はBでは第一一第一二四王朝であるのに対してWでは第一一第一二〇王朝までである。

清水隆久著

## 近世北陸農業技術史

—鹿野小四郎著「農事遺書」を中心として—

有坂隆道

戦後、今日までのわが史学界の動向を顧みると、誰しもまず農村史研究のめざましい発展を指摘することであろう。まことにこの

分野の論文・著書はおびただしいものがある。しかし、農村史研究の根底によつたわるきわめて重要な農業技術の研究は、十分ではないどころか、まだまだ明らかでないことが多いありさまである。その意味からしても清水氏の新著は注目されるべきものである。

本書の刊行は、加賀江沼郡小塩辻村の十村(大庄屋)鹿野小四郎著「農事遺書」全五巻の発見、紹介が因をなしている。その書は実に宝永六年に書かれたものであった。われわれは、北陸における元禄期の農書として加賀石川郡御供田村の十村土屋又三郎による「耕稼春秋」(宝永四年)ただ一つを知っている。その書が該博な知識をもつて他の十村たちを指導する性格をもち、ことに消費都市金沢をひかえて商業的農業の発達を示していたのに対して、「農事遺書」はもともと子孫への伝授を目的としていたが、その具体的・理論的態度の叙述を通じて、裏日本に多い砂丘と湖沼と台地に抱かれた地域の、自給的傾向の強い農業の実態を明らかにしてくれる。

本書は、この「農事遺書」の忠実な複製(一五七—二七四頁)を中心として、はじめに「第一篇 近世北陸農業技術史」(一一—五六頁)の研究を掲げ、まず「加賀藩と農政」「十村と農書」において加賀藩の農政機構における十村と農業技術との関係、およびこれらの背景として藩政確立期の社会経済史的構造にふれ、ついで「近世における北陸農業技術」において農具・肥料・稲作法・稲の品種・病虫書・畑作・養蚕・畜産につき詳細に論じている。さらに最後に、「第三篇 北陸農業参考資料」(二七五—三二〇頁)として、従来未発表の「耕作大要」「開作仕様」「鹿野家農事日誌」など、八項の資料を収めている。

われわれは「耕稼春秋」にならんでいまこの書を読んだことを大きな喜びとするともに、清水氏をはじめ関係者の労苦に対し、深く謝意を表したいと思う。(石川県片山津町教育委員会刊・五百円)